

## 課題レポート

農業工学でできそうなセクター間の連携として私はパーマカルチャーが例にあげられると考える。パーマカルチャーとは、永続する農業（パーマネントアグリカルチャー）を意味しており、そこに暮らす人々のことも配慮した農業体系のことで、地方農村における高齢者の割合の増加や都市のセミリタイアした人や、若者世代の食・農業に関する関心の高まりから、農業従事希望者がいるものの不便さから敬遠する人が多くおり、地方における設備等が整備されることによって地方の活性化をもくろむことができる。このことは、農業工学と地方行政や経済産業の部門などとの連携において最大の効率を生み出すことができると思われる。例えば、商業施設などを誘致し、住宅・交通を整備、農作放棄地を再整備することで都市にいる農業従事希望者を呼び込み、その人たちに農業がしやすい環境を作ることで人を集めることができ、その地方を活かした特産品を作るなどによって、外からのインカムが増え地方の活性化につながるることができる。このときに大切なことは、一つ前の八田興一のレポートで学んだ現地の人のことを考えるということで、そのことを配慮して農業工学を行うということがパーマカルチャーにおいて重要なことであると考えられる。

このことは一例であり、農業工学とほかのセクターが連携することで今日本が抱えている問題を解決することができる。また、日本だけでなく国際的にも有益な事業・プロジェクトが行えると考えられる。